

カント『純粹理性批判』の「無限判断」と「無限」をめぐり誤解 カント、コーヘン、エルトマン

著者	伊野 連
著者別名	INO Ren
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	56
ページ	53-66
発行年	2020-03
URL	http://doi.org/10.34428/00011689

カント『純粋理性批判』の「無限判断」と「無限」を めぐる誤解 —カント、コーヘン、エルトマン—

文学研究科哲学専攻博士後期課程満期退学

伊野 連

はじめに

本論文が扱うことがらは主に次の二点である。

1. カント『純粋理性批判』アカデミー版の編者ベンノ・エルトマンがおこなった或る改訂については是非を問うこと。

2. ヘルマン・コーヘンがカントの〈無限判断〉論を踏まえて展開した「根源の判断」(Urteil des Ursprungs, cf. Cohen 1902)に関する、カントの無限判断理解からの逸脱を指摘すること。

両者はいずれも古代以来の〈無限判断〉論がいかに理解（あるいは誤解）されたかに深く関わる。一般に無限判断はアリストテレス『命題論』の所見に端を発すると理解されているが、〈無限〉という問題に着眼すれば、プラトンやパルメニデス、さらにはアナクシマンドロスにまで遡る、哲学的な大問題であり、例えばヤスパースの「包括者」(das Umgreifende) および「包括存在論」(Periechontologie; periechon + Onthologie) などはいうまでもなくアナクシマンドロスの「ト・アペイロン」に由来するわけであるから、或る意味では実存思想の淵源を認めることもできるだろう。

第一章 カントの〈無限判断〉論

一A エルトマンの改訂

本章ではエルトマンの無限判断論をめぐる解釈を中心に検証する。

カントが『純粋理性批判』「超越論的論理学」「超越論的分析論」における「判断表」で、判断の「質」に関して、一般に形式論理学で問題となる肯定判断と否定判断の別に加えて、第三の「無限判断」の意義を強調していることについては、これまでも頻繁に論じられてきた^{*1}。同書の当該箇所におけるカントの原文は次のとおりである（紙幅の都合で段落全体

の核となる2つの文のみ引用する。[]内は文番号。傍線論者)。

[4] Hätte ich von der Seele gesagt, sie ist nicht sterblich, so hätte ich durch ein verneinendes Urteil wenigstens eine Irrtum abgehalten. [5] Nun habe ich durch den Satz: die Seele ist nicht sterblich, zwar der logischen Form nach wirklich bejaht, indem ich die Seele in den unbeschränkten Umfang der Nichttichtsterbenden Wesen setze. (A72/B97)

原著者カントが第二版（通称B版。1787年）に大幅な改訂をおこなったことはよく知られている。しかし当該箇所に関してカントは、初版（同A版。1781年）と第二版とを通じて大きな書き換えはおこなっておらず、とりわけ核心となる傍線部分はまったく同一である。

しかしこれに対して、原著者の没後約百年にして、いわゆるアカデミー版カント著作集第三巻が編集されるに際し、編者エルトマンによって改訂が施された。それは[5]の“nicht sterblich”という2語を‘nichtsterblich’という1語に改めるという措置であった（die Seele ist nichtsterblich）。

試みに、当該箇所の訳文を掲げてみる。カントの原典では次のようになろう。

[4] もし私が魂について、それは死すべきものではないものであると言うのならば、或る一つの否定的な判断を通じて私は少なくとも一つの誤りを防いだことになるであろう。[5] というのも、この「魂は死すべきものではないものである」という文によっては、私は魂を死すべきものではないものという無制限の領域に置いたわけだから、たしかに論理的な形式からは実際に肯定したのである^{*2}。

これがエルトマンの改訂にともなってどう変化するか。それは例えば、[5]「魂は不死である」（あるいは、「……不滅である」、「……死なないものである」等^{*3}）という具合になると考えていいだろう。

ではここで、本論文の第二章で主題となる、コーヘンの〈根源の判断〉説をあらかじめ先取りしておく、こうした「魂は死すべきものではないものである」という命題を、「魂は不死（不滅）である」という命題に置き換え、さらに、例えば「死なないものである」という判断（つまり〈無限〉判断）において、「死なないもの」という（意味上の）〈地点〉^{*4}から「連続性が無限判断を導く」（Cohen 1883: 35）ことによって、「不死」という（やはり意味上の）〈地点〉へと「真の移行」（Cohen 1902: 91）が果たされる、とコーヘンは主張しているのである。

一B なぜ改訂がなされたか

しかしこれらの、エルトマンの改訂も、またコーヘン独自の無限判断論も、いずれも本来のカント解釈とも、伝統的な〈無限判断〉理解からも逸脱したものである^{*5}。

以下、まずはエルトマンに絞って反証する。

カント『純粋理性批判』の一般的な解釈（ドイツ語原文およびその他の言語への翻訳にも反映されている）において、アカデミー版（言うまでもなく、半永久的に基本テキストとして用いられ続けるであろう、カント研究の最重要文献である）におけるエルトマンのこうした、原文そのものに手を入れるといういわば思い切った改訂がなぜなされたのかといえ、①原文に散見される、カント自身がたびたび残していた誤記や誤植（例えば第二版で小見出し「カテゴリーの超越論的演繹への移行」の冒頭にパラグラフ番号「§14」が欠けている（B124）など）を修正したものであり、②それはさらに具体的には、カントが当該箇所、まず〔4〕で否定判断を、次いで〔5〕で今度は無限判断をと、順を追って説明するために、形而上学では古来よく用いられてきた〈魂の不死性〉を採りあげ“(die Seele) ist nicht sterblich”を例文として挙げたわけであり、③ところが、二つの異なる判断を説明するにもかかわらず、両者の例が同一ではどうもおかしいから改めねばならぬはずだから、というのがいわば〈定説〉となっている。

エルトマンだけでなく、例えば本論文第二章で詳述するようにコーヘンもそう考えていたはずである。そして同様の解釈は、近年の邦訳や邦語研究文献においても根強く残っており、例えば有福訳は「原版のままでは意味が通じない」（同訳書上、註p. 437）として、あるいは中山訳も〔5〕が原文のままでは「無限判断ではない」（同訳書2、p. 245註6）として、いずれもやはりエルトマン改訂に従っている。

だが、本論文で後に詳述するように、上記二訳者はそもそも無限判断を誤解している。あらかじめ断っておけば、当該箇所でのカントの無限判断に関する叙述・例挙いずれにも一切誤りは無いのである（あえて言うならば、カントの叙述に不親切さはあるといえよう。これについても後述する）。

にもかかわらず、こうした誤った読解に基づくカント不信の原因がさらに、カント自身が無限判断について無理解であったため、と説明されることすら多い。

例えば、かつて我が国での〈無限判断〉論の第一人者と目されていた^{*6}石川文康（1946-2013）は、「『純粋理性批判』の当該箇所を何度読んでも、たいていの読者にとってカントの意図がどこか釈然としない理由の一つは、そもそもカント自身が無限判断の名称を誤解しているからである」（石川文康1996: 49。傍線論者）と述べ、さらにその記述箇所に付した註で、無限判断をめぐるカントの〈誤解〉に対して、ランベルトの正しい理解を例挙している（石川文康1996: 49）。しかし結論から言えば、ランベルトもカントも同じように無限判断を〈正しく〉理解していたわけである。

順に検証していこう。まず石川文康は上の引用箇所の直前で、カント自身の「ウィーン論理学」講義における「[否定的述語によって排除された] この残余の領域が無限であるがゆえに、この判断は無限判断と呼ばれる」(Wiener XXIV/2 931. 強調原著者) という記述を例に、「カント自身は」無限判断をこのように「単純に考えていた」と指摘している(石川文康1996: 49)。

また、ランベルトに関する先の引用箇所に石川文康が附した註では、ランベルトがおおよそ以下のような(正しい)理解を示している、と高く評価されている。ランベルト曰く、「[AはBではない](A ist nicht B)、「Aは非Bである」(A ist nicht-B)。前の命題においてはistとnichtが一体(例えば英語特有の略記'isn't'のように)であり、命題は否定的である。後ろの命題においては非B (Nicht-B) が全体が一つであり、命題は肯定的である。そして、非Bとは、その述語あるいは指標 (Merkmal) にはBは属さない、と言いうるような概念を表している。しかしだからといってこの概念は、まだ積極的な (positive, 具体的) あるいは一定の仕方 (bestimmte Art) で明らかになっているわけでは (kenntlich gemacht wird) ない (nicht) ゆえに、論理学 (Vernunftlehre) においては非Bは無限述語 (Terminum infinitum) と呼ばれている」(Lambert 1771: § 254, p. 228)*⁷。

石川文康はこのランベルト説を「(カントとは) 対照的に、ランベルトがこの判断契機の名称の由来を知っていた証拠」だとみなし、それと比較しつつ「われわれが今突き止めたように、「無限判断」という名称の由来は、カントが考えているのとはまったく別である」という評価を下している(石川文康1996: 53註49)。すなわち、こうした〈非-積極〉性 (nicht positiv)、〈非-規定性〉 (nicht bestimmt)こそが、無限判断の核心なのである(ただし石川文康も、彼の訳した『純粹理性批判』(筑摩書房、上巻、2014年)の当該箇所には何ら訳註を付していない。しかし訳本の性質上やむをえない措置であろうから、彼の無限判断について解釈は彼自身の論著に求めるほかはない)。

また、無限判断理解に関するカントに寄せられた疑念に関しては、石川文康だけでなく、もう一人の我が国の代表的なカント研究者である中島も「カントの論じていることがら自体がわかりにくく、カント自身の書き方も明快とはいえず、しかもみずから間違っている」(中島2010: 109. 傍線論者)と述べている。

しかし実はこの両人も、カントの適切な理解を正しく解し損ねたことによる、見当外れの批難をしてしまっている。カントがさしたる疑いもなく挙げた "(die Seele) ist nicht sterblich"という例文は、それを適切に(例えば今引いたランベルトの説明のように〈表現形式は肯定だが、といって特に何も積極的に表しているわけではない〉述語であると)解するならば、無限判断を表すものとしては何ら障碍は無く、ましてやそれを無理に'nichtsterblich'と改める必要など無いのである。

一C 各版はどう解釈しているか

しかし、両版の原文（の当該箇所）に一切異同が無いにもかかわらず、各種のドイツ語版にも、他の外国語訳版にも、当該箇所に関するテキストの問題は数多く認められる。

今回論者が実際に手に取って参照することのできたドイツ語および翻訳の各版における状況を、巻末に一覧できる〈資料〉として掲げた。それによると、カントの原文に忠実なものと、（いわゆる）エルトマン改訂型とみなせるものとは、邦訳を除くとおよそ半々といってよい。しかしそれに比して極端ともいえるのが、全十種の邦語全訳のうち、九つまでがエルトマン型だということである（これについては伊野2018で別に論じてある）。我が国独自の傾向といってよいだろう。しかし訳書という性質からか、先に引いた有福や中山、あるいは石川文康らを例外として、各訳者のこの件に関する見解が十分に入手できぬ憾みがある。今後の検証がさらに必要な課題であるといえるだろう。

第二章 コーヘンの「根源の判断」

二A コーヘンの無限判断論

本章ではコーヘンの無限判断論について検証する。まず、カントの当該箇所をコーヘンはどう解釈していたか。彼は著書『カント『純粹理性批判』への註釈』（Cohen 1907）において、あの"nicht sterblich"は'unsterblich'の方が理解しやすかっただろう（Das Beispiel von der Seele wäre besser verständlich durch den Ausdruck unsterblich anstatt "nicht sterblich."; Cohen 1907: 48）とコメントしている*⁸。

なぜコーヘンはそう解釈したか。その理由は、"Die Seele ist nicht sterblich"では主語である〈魂〉と述語である〈死すべきものである〉とが、nichtによって断ち切られてしまう、と彼が解釈したであろうからである。

このnichtがコブラ（繫辞。この場合はist）に結びつく否定は〈コブラ否定〉と分類され、すなわち否定判断を形成する。この例文（否定判断）は、そのまま裏返す（喩えて言えば〈マイナスにマイナスを掛けてプラスにする〉ように）ことにより、"Die Seele ist sterblich"「魂は死すべきものである」という肯定判断に変換できる。すなわち形式論理学における〈換質〉である。

しかしコーヘンにとっては、これでは彼の標榜する〈根源の判断〉に何ら資するものではないのである。なぜならそこには先述した「真の移行」（Cohen 1902: 91）の契機が存在しないからである。

そこで彼は〈コブラ否定〉ではない、〈述語否定〉と分類される、「Sは非Pである」と定式される無限判断を要請せねばならなかった。それが彼が『註釈』で提案した"(Die Seele ist) unsterblich"である。それはどういうことを意味するのか。

二B 〈根源の判断〉の構造

（同姓の石川文康ではなく）石川求によると、コーヘンにとって、まさに無限という概念が（コーヘンが独自に理解する）〈無限判断〉に固有の表現であって（Cf. Cohen 1902: 87）、無限は有限のたんなる否定ではない、ということになる（Cf. 石川求2018: 23）。すなわち、コーヘンが理解する〈無限判断〉は、肯定を「はじめて」根拠づけるような無、すなわち「絶対的な無ではなく、相対的な無（Nichts）」としてまさに「根源」を意味する」（Cf. Cohen 1902: 105; 117）、いわば「アルキメデスの点」（Cohen 1902: 38）に擬えるべきものである（Cf. 石川求2018: 23-24）。

そこで重要となってくるのが、先述した「真の移行」（Cohen 1902: 91）であり、コーヘンは〈無限判断〉を、〈無から有への連続性〉として理解している（Cf. 石川求2018: 24）。

さらには「無限のほかにも不滅や非凡のたぐい」といった、「私たちが日常でもよく用いるこれらの表現も（論者補：コーヘン流の）“無限判断”の立役者」であり、コーヘンによれば「それらは「見かけの（scheinbar）無」（Cohen 1902: 119）であり、「否定の見かけ」（Cohen 1908: 93-94, 101）をもつにすぎず、我々はわざわざこうした無＝否定を「媒概念（Mittelbegriff）」（Cohen 1902: 104）ないし「方便（Operationsmittel）」（Cohen 1902: 89）として活用することで、すなわち、あえて「無の迂路」「無の迂回」（Cohen 1902: 84; 105）をたどることで、真正の肯定がえられる」と、石川求は理解している（Cf. 石川求2018: 23-24）。それを裏づけるべく、彼はコーヘンの次の言葉を引用する。「判断は、有をその根源において発掘しようと望むならとくに、冒険的な迂回を避けてはならない」（Cohen 1902: 84）

以上のように、コーヘンが独自に考える〈無限判断〉は、こうして「連続性」「真の移行」「媒概念」を本質としたものでなければならず、それはコプラ否定ではなく述語否定の、〈非-〉をともなったものでなければならぬのである^{*9}。

二C コーヘンの誤り

しかし、ここには明らかな誤りがある。第一章で既に述べたように、本来の無限判断は、主語と述語との繋がりを一切断ち切る、言うならばむしろ判断以前の関係のようなものである。

それは形式論理学ではたしかに〈Sは非Pである〉と図式化されるが、かといってその「非P」が何らかの肯定的要素となることはまったくない。そこにはただひたすら、〈SはP以外のものである〉としか主張しか存在しない。

例えば、我が国を代表するヘーゲル研究者である加藤は、無限判断を（このカントの当該箇所において）コーヘンと同じく'unsterblich'で（さらにいえば、ほとんどすべての邦訳と同様の「不死的である」で）理解しているが、コーヘンとはまったく異なる見解として、およそ次のように述べている。

「『靈魂は死すべきものであり、かつ死すべきものでない』と言えは矛盾であり、『靈魂は、可死的であり、かつ不死である』と言えは矛盾ではなくなるということになるのである。カントは、「……は死すべきものではない nicht sterblich」という「否定判断」と、「……は不死である unsterblich」という「無限判断」とを区別する古い論理学で行なわれていた区別を復活させて、判断の質に関して「肯定」、「否定」、「無限」という三つのものを区別した」（加藤1980: 322）。

そして加藤も認めるように、カントから「ヘーゲルもこの区別を受け継いだ」（加藤1980: 322）。すると、形式論理学の鉄則である矛盾律は、「同一の主語と、同じ意味の述語に関して、肯定判断と否定判断を連ねることを禁ずるものであって、肯定判断と無限判断を連ねることを禁ずるものではない、ということになる」（加藤1980: 322-323）。これは確かに一見「興味深いこと」に映るかもしれないが、よくよく考えてみれば、無限判断はいわば〈判断以前の判断〉なのであって、それが肯定判断と連ねられたとしても、何ら不都合はあるはずがないのである。

では次に、〈否定判断〉と〈無限判断〉とはどこで区別されるか。それは、「『不死』、『無限』、『非分割』というような述語を、合成されたものとみるか、単純なまとまりをもつものとみるかという、意味形態の完結性にのみ関わっている」（加藤1980: 323）。したがって、名辞が否定の接頭辞をもつ複合語であるか否かには無関係だということになるのである（Cf. 加藤1980: 323）。

以下、こうした加藤説を踏まえて改めてコーヘン流解釈を捉え直してみる。

二D 無限判断の真の核心

コーヘン流の〈非-死すべきもの〉即〈不死〉という解釈は、本来の無限判断を理解し損ねていることになる。少なくとも、古代に発し、カント-ヘーゲルへと正統に継承された無限判断に関しては、そう断ぜざるをえない。

一部の的確なコーヘン研究者にとっても、同じ評価が下されている。例えばブラクスタインはこう述べている。「（論者補：無限判断をめぐるカント以降の）この歴史はコーヘンとは対立する。なぜなら、マイモン、ヘーゲルそしてシェリングは無限判断を、主語と述語との間にいかなる合理的な関係も無いような命題と定義しているからである」（Bruckstein 2004: 13; cf. 石川求2018:）。マイモニデス、マイモンといったヘブライ思想家については本論文ではさらに詳述することはできないが、カント、（フィヒテ、）シェリングそしてヘーゲルへと正統の無限判断論は継承されている。しかしそれは、コーヘンの解釈したのとは懸け離れた「主語と述語との間にいかなる合理的な関係も無いような命題」にはかならないのである。

あるいは、誰でも容易に思い浮かぶような例を挙げて糾弾してみればよい。〈ピカソは凡人（人）ではない〉は、或る無限判断として理解することも可能である。しかし、この命題（＝

判断) から、それは〈ピカソは非凡である〉ということであり、すなわち〈ピカソは天才である〉と解釈するのならば、そこには〈二〇世紀最大の天才画家パブロ・ピカソ〉という〈過去の歴史的事実〉、そしてそれらは今日の我々にとって〈予備知識〉ないし〈先入観〉、端的に言えば〈教養〉、それが多分にそうさせるのである。そしてそうであるのならば、その解釈は主語の意味を事前に定めてから述語の意味と照らし合わせるという〈論点先取 (petitio principii)〉の誤謬に陥っていることになるのである。

むすび

ヘブライ思想史の重要な人物の一人としてのコーヘンにとって、例えば〈不死〉、〈不滅〉、〈無限〉、〈非凡〉等々といった存在は、まずもって〈神〉である。ここから、偽ディオニュシオス文書からスピノザをも視野に収めた否定神学の系譜に論を進めることももちろん本論文では叶わぬが、コーヘンがカントの超越論的論理学に対して示した独自の見解は、本論文のように批判的に評価されるのみならず、より多角的に捉えられる余地があるといえる。

そもそもハイデガー以降、新カント学派自体が「認識論」の一言で片づけられがちである。しかしそこには多くの問題が未だ伏在しており、さらなる検証の要を感じさせずにはおかない。

資料

論者が参照した主なドイツ語原典および仏英伊日各語訳における当該箇所処理一覧 (K: カント原著型、E: エルトマン改訂型。AAはアカデミー版。その他、今日もよく用いられる全集版についてもその旨を付記した)

1835: E: Tissot (French)

1855: K: Meiklejohn (English)

1867: K: Hartenstein

1877: K: Kehrbach

1880: E: Erdmann

1881: E: Müller (English)

1911: E: Erdmann (AA)

1913: E: Görland (Cassirer)

1920: K: Barni (French)

1921: E: Gross

1922: E: Valentiner

1924: E: Gentile/Lombardo-Radice (Italian)

1924: K: Schmidt

1926: K: Schmidt (PhB)
1928: E: Messer
1931: E: 天野
1931: E: 安藤 (抄訳)
1934: E: Smith (English) (抄訳)
1944: E: Tremesaygues/Pacaud (French)
1956: K: Weischedel
1961: E: 篠田
1962: E: 高峯
1968: K: Weischedel (Suhrkamp)
1973: E: 原
1980: K: Delamarre/Marty (French)
1998: K: Guyer/Wood (English)
1998: K: Timmermann
2004: K: 宇都宮
2005: E: 原 (渡邊らによる改訂を含む)
2006: E: 有福
2008: E: 中山
2012: E: 熊野
2014: E: 石川
計33種
K 12種
E 21種

註

*¹ この古典的な問題に関する最も新しくかつ最も綿密な考察は、石川求2018である。本論文も同書から最大の恩恵を蒙っている。また、本論文に先立つ論者の予備的な考察の一つとして、伊野2018も参照されたい。

*² 本論文における訳例「死すべきものではないものである」はいかにも生硬な言葉遣いとも思われようが、例えば無限判断の〈原点〉の一人アリストテレスの『命題論』では「すべての人間でないものは正しくないものである」($\pi\acute{\alpha}\varsigma\ \sigma\upsilon\tau\acute{\iota}\ \delta\acute{\iota}\kappa\alpha\iota\omicron\varsigma\ \sigma\upsilon\tau\acute{\iota}\ \delta\acute{\iota}\kappa\alpha\iota\omicron\varsigma\ \sigma\upsilon\tau\acute{\iota}\ \delta\acute{\iota}\kappa\alpha\iota\omicron\varsigma$) という命題と「すべての人間でないものは正しくない」($\sigma\upsilon\tau\acute{\iota}\ \delta\acute{\iota}\kappa\alpha\iota\omicron\varsigma\ \delta\acute{\iota}\kappa\alpha\iota\omicron\varsigma\ \sigma\upsilon\tau\acute{\iota}\ \delta\acute{\iota}\kappa\alpha\iota\omicron\varsigma$) という命題とは「同じことを意味する」(19b17-18) とされている。以上から、無限判断の定式 (と一応はみなされている) 「S は非 P である」に忠実に当て嵌めるために採用したものである。古代ギリシャ語、カントが念

頭に置いて考察していたラテン語、彼の母語ドイツ語、そして我々の日本語と、それらを組み合わせる以上、こうした不具合は不可避といってよいだろう。加藤もまた「ある述語を肯定形と否定形の両方の形で言えるか言えないかは、まったくその国の国語の性質によることで本質的意味はない」（加藤1980: 323）と述べている。

*³ 実際に近年相次いで出された邦訳例を見ると、「不死」（原新訳、宇都宮／田中訳、熊野訳、石川訳）、「不死的」（有福訳）、「死なないもの」（中山訳）等となっている。

ただし、本論文の他所で詳述してあるように、全邦訳中の一例を除くすべてのものが二つの箇所を訳し分けているのに対して、ただ宇都宮／田中訳のみが、いわゆるPhB旧版（シュミット編）の措置、すなわちカント原文に忠実に、[4]と[5]とを同一に訳するという方針を貫いている。これはすなわち、宇都宮／田中訳が“(die Seele) ist nicht steblich”を一貫して「(魂は) 不死である」と訳している、ということであり、ここを「死すべきものではないもの」と訳した論者はこの見解（訳語）に関しては大きく意見を異にしているが、テキスト選択に当たり、あえてアカデミー版ではなく、PhB旧版に従いカント原文に忠実に日本語訳したという方針には強く賛同する。

*⁴ 〈地点〉とは何のことかと訝しく思われる向きもあろうが、無限判断を導く「連続性」を保証する「地（点）」について、実際コーヘンはこう述べている。「精神は非物質的である。精神は、物質的なものの排除によって特徴づけられるような思考的諸規定の同じグループに属する。この無限のグループが、比較の第三項（terminus comparationis）である。しかし第三項は辺鄙な共有地（ein entlegener Gemeinplatz）であってはならず、むしろ自然な境で隣り合っているものでなければならない。精神にとってそのような連関が達成されうるのだ、という思惟の気概は、意識の連続性のこうした源泉に養われる。とすれば、精神にかんする肯定判断の力は結局あの無限判断に基づいてはいないだろうか」（Cohen 1883: 36. 訳文は石川求2018: 26に基づく。なお、石川求は「辺鄙な共有地」をあえて「とっぴな決まりことば」と意識しており、所説ともども大いに参考となった）。

*⁵ ところで、コーヘン（1842-1918）とエルトマン（1851-1921）とはたしかに同時代人であるが、おそらくコーヘンはエルトマンとは無関係に、まったく個人的に彼独自の無限判断論を着想したのであろう。その理由の一つには、新カント学派の二大潮流の一つマールブルク学派の領袖コーヘンが、当時新たに企画されつつあったドイツ科学アカデミーによる、まさに画期的ともいえるカント全集の編集には加えられることなく（Cf. 村岡2008: 40-42. 村岡はこれを反ユダヤ主義に関連づけている）、ベルリン大学のディルタイ（1833-1911）を主幹として企画され、エルトマンが『純粹理性批判』第二版と初版（第三・四巻）をいずれも編集することとなった経緯もあるし、さらに、それ以前のエルトマンのこの件に関する所説（本論文巻末資料にあるように、エルトマンは既に一八八〇年に自らが編集した『純粹理性批判』を刊行し自説を明らかにしていた）に基づいて、コーヘンが彼の所説を作り上げていったわけではもちろんないはずである。むしろコーヘンはアカデミー版とは対立的な、いわば離反した立場から、後のカッシーラー版（ゲーラント

編)とPhB旧(フォアレンダー)版双方の全集成立に関与している。

*⁶ 彼は『岩波 哲学思想事典』(1998年)でコーヘンの著書「『純粹認識の論理学』」(*Logik der reinen Erkenntnis* 1902)の項目を執筆し、それを「重要なのは、他のすべての判断の根源となる〈根源の判断〉が、「Sは非Pである」と定式化される〈無限判断〉に求められ、「非P」が根源を意味するとされることである。あるものの根源はあるもの自身でありえないことから、それは別のあるもの、すなわち「非P」と表現されるものだからであるという。ここには、微分法に基づいて、非存在を存在の根源とするコーヘン特有の思想が働いている」と結んでいる。この重要な〈根源の判断〉に関しては、当然ながら本論文でも後に詳述する。

さらに彼はその前年の『カント事典』(1997年)ではまさしく〈無限判断〉の項目執筆も担当していたわけだから、こうした彼の、コーヘンの流れを汲む〈無限判断〉論(〈無限判断〉解釈)が当時の我が国哲学界では定説・主流であったと推測される。

*⁷ さらに石川文康はここに先立つ箇所でも、ランベルトについて「彼は無限判断考察を、特に「存在と非存在」(*das Seyn und das Nichtseyn*) (Lambert 1771: 196)あるいは「何かであることと無であること」(*das Etwas seyn und das Nichts seyn*) (Lambert 1771: 227)等に関する存在論的・形而上学的論究の一環としておこなっている」と述べ、さらに「彼が無限判断を論理学書ではほとんど扱っていないのは、この判断契機の真の根を見つめていたからである」と理解している。さらに、「「時として「ない」(*nicht*)という辞は述語に付加され、それによって述語はいわゆる無限述語に変わられる」(Lambert 1771: 201)。またこのことは、カントが考えていたように、無限判断が哲学的にも本質論的にも、もはや論理学ではなく、存在論に根をもっていることを改めて示唆している」とも述べている(石川文康1996: 42)。

*⁸ もしこの提案が[5]だけではなく、あるいは[4]もまたその対象としているとすればそれは大問題であるが、どうやら彼も、この件でカントは、否定判断と無限判断との対比を説明しようとした、と解釈し、それを彼独自の無限判断論へと関連づけているようである。

*⁹ 後年に、コーヘンのいわゆる新カント学派三部作(『純粹認識の論理学』(=『論理学』)、『純粹意志の倫理学』、『純粹感情の美学』)を個人完訳することとなる村上寛逸は、その第一訳書『論理学』(1932年)の冒頭に置いた「用語解説」の最初で、「一 非の判断」として、「Nichtの判断、即ち根源の判断」をコーヘン論理学の枢軸とみなし、およそ以下のような、興味深い記述をおこなっている。すなわち、Nichtsは一見「無」であるがここではそうではない。村上は田邊元『数理哲学研究』pp. 358-359の以下の文言を引きつつ、「マールブルク派の言方に従へば、無限の過程たる思惟が其の根原の原理に従つて基礎を求める」ことであり、その基礎とは「已に与へられた対象に存するのではなく、これから発見すべきものを意味」し、「即ち其は未だ思惟の攻勢を経ざるものとして(の)「無」たる原体験の中に発見定立せらるべきものである」とし、ではそれはどういう意味であるのか、と問題提起している(同訳書、pp. 13-14)。

そこでさらに村上は、コーヘン自身による説明に基づき、「根源のNichtsとは所謂Nichts(論者

補：先述した一見「無」と思われがちなNichts)ではなく、「それは無限判断のNichtsであり、ギリシャ語の $\mu\eta$ による判断である」と述べ、さらにこうも述べている。「『無』は漢語に於いて本来、無限判断を表はす言葉であるであらうか？」(同訳書、p. 14)。

これはどういうことか。それは、コーヘンは根源の判断であるNichtsと、矛盾の判断、すなわち否定Nichtとは峻別されるということである。さらに否定の接頭辞「不」という漢字も、根源の判断を表現するには不適當である。村上によると、「無」は無限判断の意味に使用されることもあるが、それは特殊例であるにすぎず、「『無』はこれを判断として解するならば、本来は不有を意味する。即ち、それ自身の中に既に否定を含んで居る」(同訳書、pp. 15-16)。

したがって村上によれば、本来の無限判断を表す表現としては、「非」こそが適當であり、「無」を使用することは明らかな誤謬であって、許されざることである。なぜなら、「無」即ち「不有」の判断においては、根源の判断に於ける不可欠的制約である「連鎖」が働かないからである (Cf. 同訳書、p. 16)。

そうだとすると、コーヘン流の無限判断を、単純に〈非-〉と図式化し安易に批難することは、新たに大きな誤謬を生じさせかねないとも思われる。それ故に、再考が求められる。

現在では、例えばわが国でも幾人かの研究者が率直にコーヘンを「忘れられた思想家」(村岡 2008: 34)、あるいは「一方で端正、したがって退屈な印象を与え、もう一方ではすでに御用済みの感を及ぼす」(石川文康1996: 251)などと評している。もちろん、現にこうしてコーヘンに言及し、彼を採りあげている研究者こそかえって、きちんと彼の問題と向き合っているわけであり、その姿勢に学ぶべきところは多いだろう。

文献 (カント以外はアルファベット順)

Kant's gesammelte Schriften, ed. by Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften / Akademie der Wissenschaften zu Göttingen, Walter de Gruyter & Co., Berlin 1900ff.

Bruckstein, Almut Sh., *Hermann Cohen, Ethics of Maimonides*, tran. with commentary by Bruckstein, Madison 2004

Cohen, Hermann:

Das Prinzip der Infinitesimal-Methode und seine Geschichte. Ein Kapitel zur Grundlegung der Erkenntniskritik, Berlin 1883

Logik der reinen Erkenntnis, Berlin 1902 (『純粹認識の論理学』藤岡藏六訳述、岩波書店、1921年；村上寛逸訳、第一書房、1932年)

Kommentar zu Immanuel Kants Kritik der reinen Vernunft, Leipzig 1907 (『カント純粹理性批判解説』今田竹千代訳 (春秋社「世界大思想全集」43、1929年に所収))

“Charakteristik der Ethik Maimunis,” in: *Moses Ben Maimon: sein Leben, seine Werke und sein Einfluß: zur Erinnerung an den siebenhundersten Todestag des Maimonides*, ed. by W. Bacher et

al., Bd. I, Leipzig 1908

Lambert, Johann Heinrich, *Anlage zur Architektonic*, vol. I, Riga 1771, in: *Philosophischen Schriften*, ed. by Hans-Werner Arndt, vol. III, Hildesheim 1965

伊野連「カント『純粋理性批判』「無限判断」について」(『埼玉学園大学紀要』人間学部篇、2018年、pp. 1-11に所収)

石川文康『カント第三の思考 法廷モデルと無限判断』名古屋大学出版会、1996年

石川求『カントと無限判断の世界』法政大学出版局、2018年

加藤尚武『ヘーゲル哲学の形成と原理——理念的なものと経験的なものの交差』未来社、1980年

木村博「判断する自我——フィヒテの定立判断論——」(『法政大学教養部紀要』104、pp. 89-102、1998年に所収)

黒積俊夫『ドイツ観念論との対決 カントの擁護のために』九州大学出版会、2003年

村岡晋一『対話の哲学——ドイツ・ユダヤ思想の隠れた系譜』講談社、2008年

中島義道『『純粋理性批判』を噛み砕く』講談社、2010年

富田恭彦『カント哲学の奇妙な歪み 『純粋理性批判』を読む』岩波現代全書、2017年

Infinity judgments in *Critique of Pure Reason* by Kant and the misunderstanding surrounding 'immortality' --- Kant, Cohen, Erdmann ---

INO, Ren

Abstract:

Kant presented his own infinite judgment theory in *Critique of Pure Reason* (II. Transcendental Logic, Table of Judgments, A70/B95). Generally, judgment is limited to two qualities : positive or negative. However, Kant raised a third : infinite judgment.

His unique view caused many misunderstandings. The most notable of which is shown by Benno Erdmann in the Academy Edition of *Kant's Complete Works*, vols. III and IV, *Kritik der reinen Vernunft* (first edition 1781 and second edn. 1787), both edited by Erdmann.

Furthermore, Erdmann's viewpoint in distinguishing between “the soul is not mortal” (Die Seele ist nicht sterblich) and “the soul is immortal [non-mortal]” (Die Seele ist nichtsterblich) caused problems related to incorrect views surrounding 'immortality.'

This paper points out Erdmann's mistake and aims to elucidate the misunderstanding in Cohen's thought accompanying it.

Keywords: Kant, *Critique of Pure Reason*, infinite judgments, Benno Erdmann, Hermann Cohen